もくじ　特別展　あだち物流のひみつ 1P　鹿浜での子どもの生活③ 2P
愛されたお化け煙突 3P　千住大橋は千住の町の生みの親 3P　千住歴史大全 4P

足立史談
第560号
2014年10月15日
足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
〈25-308〉

くろがねKGL3型　昭和32(1957)年製造
870ccエンジン、積載量750kg、全長367cm・全幅151cm・全高185cm
株式会社三共モータース所蔵
手軽な運送車として、区内でもたくさん活躍していた。

特別展 あだち物流のひみつ

モノを運ぶ歴史と文化

会期 平成26年10月21日～平成27年1月12日

■あだちと物流

日光道中の初宿として知られる千住宿ですが、宿場機能より、問屋の集まる流通の町であることが知られています。江戸東京の都心部の周縁という位置、そして河川による舟運に適した地形といった地の利が、さまざまな物資が集散する場所として確立させました。

現在の大型化・長距離化が進んだ物流の世界と平行し、細かく張り巡らされた流通網があります。足立区は運輸事業者数が二三区でもトップクラスで、中小規模の事業者が多いのが特徴です。都心の周縁という位置を生かし、迅速に細やかにモノを運び届ける産業が古くから発達した土地といえるでしょう。

■展示のみどころ

今回の展示では、Ⅰトラックの時代、Ⅱ人と馬のちから、Ⅲ舟運のひみつの三つの柱に分け、江戸時代から昭和四〇年代まで、トラック輸送が広がり、物流の大きな変化が始まるころを中心に紹介します。

トラック輸送の普及のさきがけである小型自動車、オート三輪のくろがねを展示します。三輪車では軽自動車のミゼットが有名ですが、積載量が３００ｋｇ程度で、近距離配達が中心のミゼットに比べ、二倍以上の荷物が運べ、比較的長距離走行も可能でした。たくさん荷物を積むと、時速三〇キロ程度でしか走らなかったといいますが、それでも画期的な輸送自動車でした。

特別展図録
A4版　カラー64頁　600円
郷土博物館・区役所2階　区政情報室で販売します。

特別展　ギャラリートーク

物流の文化遺産

日時：11月15日(土・無料公開日)
午後2時から3時30分
講師：多田文夫（当館学芸員）
＊参加ご希望の方は直接博物館にお起こし下さい。

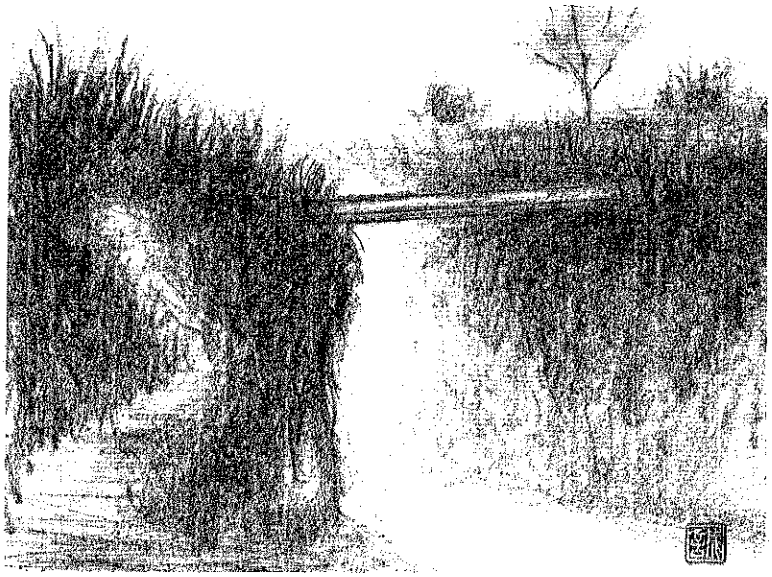
縁故疎開ですごした北鹿浜町の想い出㉒

鹿浜での子どもの生活　その3

小川　誠一郎

■川を渡る　家から西を目指し畑の中を突っ切って行き、早瀬の用水堀を渡って横土手を越えると、すぐ眼の下五メートルほどに、幅四、五メートルのシジミの川が流れている。（前号航空写真参照）これは皿沼の貯水池堰からの放水が、横土手を挟んで高低二筋の流れとなり、低い埼玉側のシジミの川はもっぱら放水の役割を担っていたようだ。少し行くと荒川堤下に構築された煉瓦造の水門を経て芝川に入るのが見えた。鹿浜よりも皿沼の土地が高いので、用水の水位・落差を調整するため考えられた給水プランだったのだろうか。

草深い横土手の脇から川の向こう岸へ、幅四〇センチメートル程の見事な船板が一枚渡してあり、先を行く子供らは駆け足で渡って行く。「セイちゃん早く来いや？」、「怖くってだめだよ！」下の流れから目をそむけて、船板に裸足を密着させ、一歩一歩擦り進めて、やっとのことで渡り切った。セッちゃんの姉のチャコさんや女の子が二、三人一緒の時もあった。裸になって川辺に降りても、ここでは、以前、チャコさんが流れにのって深みへはまりそうになり怖い思いをしたので、皆、川には入らなかった。川が大きくカーブする内寄りの、流れが緩んだところに形成されたきれいな砂地で絵を描き、水浴びをして遊んだ。シジミはいなかった。



シジミの川と船板

切り立った川岸のそげ落ちた斜面に帯状の粘土層が見える。青味がかった灰白色の層は良質で、粘土細工ができたし、焼き物もできると教わった。粘土のコマを作って天日で乾かし、かまどの稲わらの燃え残った真っ赤な火の山へ投げ込んでみた。しかし、温度が低くいのだろう焼きものらしくならなかった。いつの間にか船板の橋を走って渡れるようになっていた。

■自然と怪我　その地点からシジミの川を百メートルほど遡ると、古い角材が一本渡してあって、近所の農家の人は天秤棒を肩に軽く渡り切る。これは第三の遊び場、運河（註）への近道、皆と一緒に渡らねばならぬ関門になった。幅は二〇センチメートルあるかなしか、船板橋より川面まで高さがある！最初からそろそろ擦り足をつづけてなんとか渡り切り、面目は保てたのだが、枯れささくれたところへ右足を引っ掛け、親指に深いとげを刺してしまった。痛む足を引きずり、気もそぞろに半ば泣き顔で家へ戻って来ると、呼んでくれたのだろうか竹ちゃんが駆けつけ、指先をアカチンで真っ赤にして剃刀で切開し、黒っぽい太いのを抜いてくれた。粗末な包帯を巻いてしばらくは下駄をはいて外出禁止だ。助け人として忽然と姿を見せる気の良い竹ちゃんは、実にありがたく不思議な存在だった。

島では普段、青大将、シマヘビ、ヤマカガシなどが見られた。戦時中、農地の手入れが行き届かなかったのでマムシが増え、野良仕事中かまれる人が出た。矢萩三保三さんや叔父など、大人達が続けてやられた。血清を打って大事に至らなかったが、包帯巻きの腕を三角巾で吊り、自転車で医者に通う姿が痛々しかった。

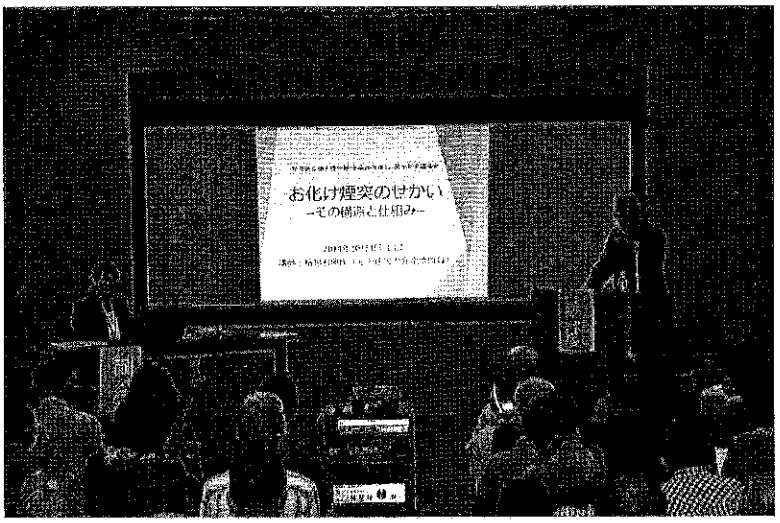
（註）運河と呼ばれた水路は、荒川放水路の掘削に並行して、芝川整備のため計画された新芝川掘削工事の一部で、疎開当時、現在の領家橋付近まで完成していた。工事途中で戦争に突入したため、三〇数年間中断され、一九六五年になってようやく荒川と新芝川との合流工事が完成し、首都圏荒川流域の整備計画が完了した。同時に環状7号線と鹿浜橋が開通し、並走する首都高速川口線（一九八七年）とに挟まれた鹿浜は、北関東から都内へ入る交通の要衝となり、のどかな農村風景は永久に失われ、住宅地として整備されることになった。あの懐かしい匂いに満ち、まぶしい色彩で彩られた豊かな田畑、世代を重ね精一杯生きたお百姓さん達の日焼けした笑顔。今や全てが存在したことすら疑わしくなり、老人達の脳裏にひそむ幻と化してしまった。

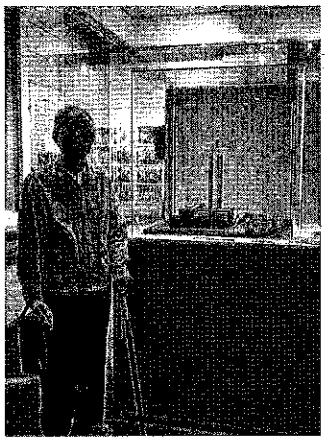
（慶応大学名誉教授）

愛された　お化け煙突

ミニ展示「記憶になったお化け煙突 ―解体50年―」から

郷土博物館で開催したミニ展示は、多くの方にご来館いただきました。10月4日に開催した、元千住火力発電所所員格和宏典さんによる講演会「お化け煙突のせかい―その構造と仕組み―」（写真）では、大勢の方に感想を頂戴し、あらためてお化け煙突が、人々に愛されていたことがわかりました。





▲格和さんと発電所時代の同僚の方々。（内覧会にて）

◀模型の監修者姫野さんも講演会を聴講。

お化け煙突が稼動していたのは大正五年から昭和三八年まで、戦後の復興を遂げ、高度経済成長の象徴である東海道新幹線の開通、東京オリンピックの開催を迎えた昭和39年に解体されました。実物をご記憶の方も五〇歳代半ば以上になっています。大きく日本が成長していく変動期、新しいものにその地位を譲るようにすがたを消した煙突に、当時を思い起こすのかもしれません。なにより本数が変化して見えるというユニークな構造が人々をひきつけ、誰の記憶にも強く刻まれています。

【参加者アンケートより】

お化け煙突が解体されたのは昭和39年です。私は元宿小学校6年生の頃でした。煙突のパネルが一枚一枚クレーンで下に下ろされる様子を学校の教室の窓から見ていました。パネルが太陽の光に反射してキラキラ光りながら降りてくる光景を今でも昨日のことのように思い浮かべることができます。（男性　61歳）

親戚の家が南千住にあり、中学生のころ遊びにくるたびに、八歳年上のいとこと荒川でボートに乗り、お化け煙突が1から4本に変るのを楽しんでいた時代をなつかしく想いだします。（女性　76歳）

―お化け煙突をもっと知りたい方に―

◆『足立区立郷土博物館常設展示図録』　600円

◆〈常設展示改修報告4〉
「千住火力発電所の復元模型
―失われた近代化遺産を模型にする―」
『郷土博物館紀要32号』700円

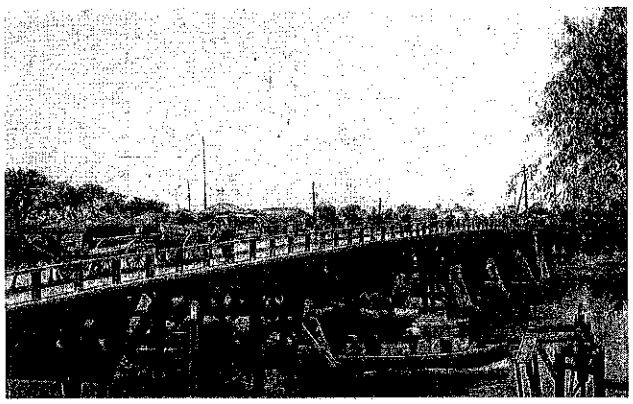
◆「晩年期の千住火力発電所について
―平成25年度寄贈資料より」
『郷土博物館紀要35号』400円

千住大橋は、千住の町の生みの親

櫟原　文夫

千住の町には江戸の動脈といわれた隅田川が流れております。その隅田川に江戸幕府ができる前、文禄三（一五九四）年いまから四二〇年前に最初に架けられたのが千住大橋です。当時はほかに橋もないので名前も「大橋」と二文字だけのものでした。

橋が架かると江戸五街道のうち日光街道と奥州街道の二つが千住を通ることになりました。おかげで千住には宿場ができ、市場が発生し、流通の拠点となり大変栄えました。



千住大橋　大正５年「南足立郡誌」より

人口も増え、商店が繁盛します。文人墨客が集まるようになり、文化の交流が盛んになり地域文化が発展したわけです。

ご存知の松尾芭蕉は、元禄二（一六八九）年三月二七日、「行く春や鳥啼き魚の目は泪」と千住からおくの細道へ旅だちます。

伊能忠敬も寛政一二（一八〇〇）年四月一九日、歴史的な測量の第一歩を千住から旅立ちます。そして最後の将軍、徳川慶喜も慶応四（一八六八）年四月十一日、無血落城のために泪ながら千住大橋を渡り水戸へ落ちます。徳川家康が江戸に開府するために架けた千住大橋には、徳川幕府終焉にもかかわるという不思議な歴史もあるのです。

千住にはこのようにさまざまな歴史があり、伝統生活文化も綿々と続いております。私は、こんな千住の町を誇りに思い暮らしております。町に誇りを持てるというのはありがたいことです。

これらはすべて千住大橋のおかげです。感謝すべきは「橋」なのです。橋があるから宿場、市場、町が発達し文化が発展したのです。ですから、私は千住大橋について聞かれると、いつもこう答えます。「千住大橋は、千住の町の生みの親です」と。千住大橋が架かったからこそ現在があるのです。町に誇りを持って暮らせるのは、橋のおかげなのです。

どこの町の橋も皆そうだと思います。多かれ少なかれ、橋のおかげでさまざまな恩恵を受けていることは間違いないと思います。

私たちは普段、橋は生まれる前からあったもので当たり前のように思ってしまっています。地域に生活する人と人とを繋ぐために、先人が危険をおかして作ってくださったものであることをつい忘れています。それではいけません。町の歴史を伝え、文化を語り、いかに橋が地域にとって大切な物であるかという事を子どもたちに伝えていかなければなりません。

千住大橋にはいくつかの伝説も残っています。その一つを紹介します。

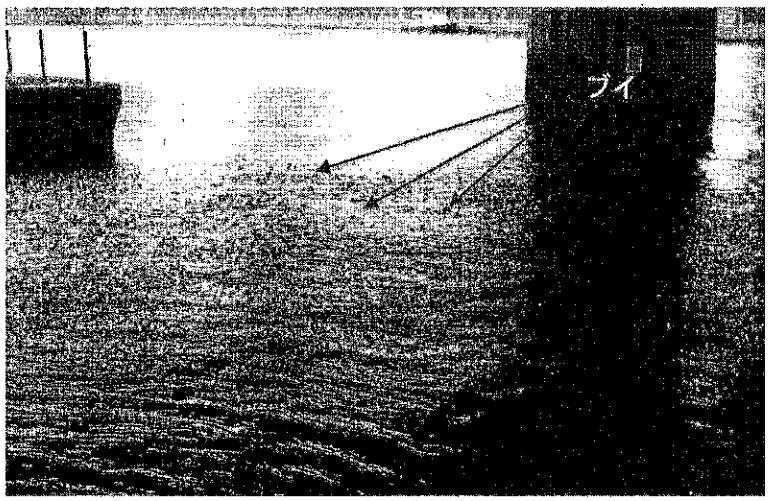
「伊達政宗公は多人数を引き連れて渡船にて、荒川を渡ったが、一日かけても渡りきれなかったので、太閤秀吉に橋を架けることを願い出たところ、「自費にてかけるは勝手次第」（『隅田川雑記』）とあって高野槙を寄進したという。」伊達政宗をほめた川柳も伝わっています。

伽羅よりも　まさる千住の槙の杭

千住の古い家々の神棚や仏壇の奥に、明治一八年に流失した高野槙の橋杭で作られた彫刻が大事に保存されています。この彫刻は、昭和二年に、現在の鉄橋に架け替えられたときに作られました。千住が現在に至る隆盛を見たのは、日光道中と千住大橋のおかげです。その恩義を形として残すため、地元の彫刻家富岡芳堂に依頼したものです。

平成一五年六月の「隅田川・旧千住大橋基礎杭調査」によって、この高野槙の橋杭が千住大橋の橋下に残っていることが確認され、橋上からその遺構を示す三個のブイを見ることができます。

（ＮＰＯ法人千住文化普及会　代表）



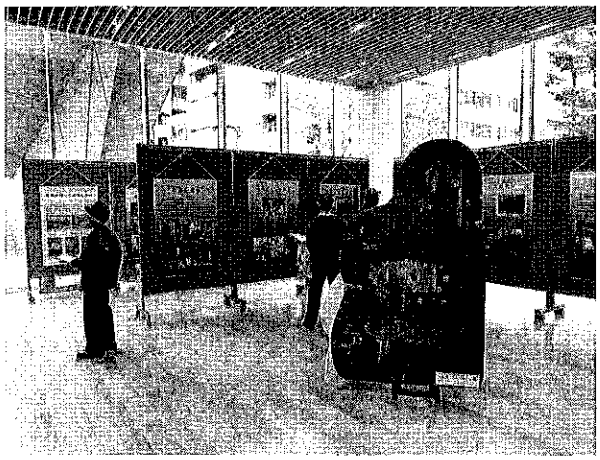
「隅田川・旧千住大橋基礎杭調査報告書」平成15年より

そんな♥千住の魅力を大紹介！
郷土博物館出張パネル展
「千住歴史大全（せんじゅれきしたいぜん）」

東京電機大学ギャラリー（千住旭町５番）

会期　10月25日～11月10日
26日（日）・9日（日）は休校
＊2日・3日は旭祭です。

開場時間　9:00～19:00　入場　無料

千住の歴史・文化をさまざまなテーマで紹介するパネル展です。

今回は、博物館の展示で好評だった「記憶になったお化け煙突」展から、写真パネル等を出展するミニコーナーを設けます。大学祭と一緒にぜひお楽しみ下さい。